

韓国の「母胎信仰」の形成と拡散

——その社会的・教会的要因——

金 潤 貞

はじめに

韓国のキリスト教には「母胎信仰」という用語と考え方が存在し、信者たちの中で一般化している。「母胎信仰」とは、「母胎にいる時から持つようになった信仰」、もしくは、「自分の意志、決定権とは関係なく、生まれながらにして父母、或は、母親から伝授された信仰」を意味する¹。Lee Eun Yeong によると、「母胎信仰」は母の胎内で親から伝授された信仰を意味し²、Chu Chang Ho は、「母親の胎内にいる時からキリスト教を信じ、赤ん坊の時から信仰を持つ人、また、自分の意思とは関係なくキリスト教家庭に生まれ、両親の信仰に従い、否応なく教会に通う人々」として定義している³。即ち、「母胎信仰」には、「胎児が母親の胎内にいる間に、母親の信仰により既に信仰を伝授されて生まれる」という母系的思想と、出生後の家族の信仰教育によってキリスト教化される社会的過程の両方の意味合いが含まれている。

韓国で「母胎信仰」とは、クリスチャン家庭で生まれた子どもたち自身を表現する言葉であるとともに、母親から受け継いだ信仰を指す言葉である。つまり、母胎を通して信仰を受け継いだ人々の自意識を表すのであり、そこから派生に「私は母胎信仰です」と人物そのものを表現することもある。しかし、「母胎信仰」が信仰の継承という一般的な概念と明らかに違うのは、「母胎信仰」の中に含まれている「胎内での信仰の伝授」という独特な考え方である。この考え方は、「母胎信仰」を論じる時に常に問題となる点でもある。なぜ、韓国ではキリスト教信仰の継承を「母胎信仰」と名付け、「胎内での信仰の伝授」という独特な考え方をするのだろうか。

この考え方が果してキリスト教思想から起因したものなのか、韓国の民俗・文化的概念の残存物なのかについては様々な意見がある。この「胎内での信仰の伝授」とい

1 Kim Jae Gueon 『교회 용어사전』(教会用語辞典)、命の言葉、2018、64頁を参照。

2 Lee Eun Yeong 「모태신앙을 가진 청소년들이 신앙생활에서 경험하는 갈등에 관한 연구」(母胎信仰を持っている青少年たちが信仰生活で経験する葛藤に関する研究)、延世大学校連合神学大学院、2006、4頁を参照。

3 Chu Chan Ho 『못해 그래도 크리스찬: 힘 잃은 모태신앙인들을 위한 신앙안내서』(出来ない。それでもクリスチャン:力を失った母胎信仰者たちのための信仰案内)、ヨダン、2016、28項を参照。

う思考は、女性の出産と関連する韓国の民俗・文化の中にもその痕跡が見られ、「母胎信仰」を福音と韓国文化との出会いの中で生じたキリスト教文化として認める可能性も考えられる⁴。しかし、「母胎信仰」の概念が多くのキリスト教信者たちの間で拡散、定着するまでには、単に民俗・文化的要因以外にも当時の人々が共感可能だった社会的要因と教会的状況が背後に大きく作用したのではないかと推測される。

「母胎信仰」に関する具体的研究は殆ど進んでいない。唯一、前述した Lee Eun Yeong が信仰に対する子どもたちの悩みを牧会学的に考察した。他に、青少年期に体験する親子間の葛藤や教会に対する意識、宗教教育などの問題に触れている研究は一部あるが、それらは「母胎信仰」を直接的に扱ったものではない⁵。

また、学術的論文ではないが、前記の Chu Chang Ho が『出来ない。それでもクリスチャン』という図書を出版している。彼は、「母胎信仰研究所」を開き、「母胎信仰」を持って生まれた人々の悩み相談や信仰教育セミナーを担当し、その実例を基盤として「母胎信仰」を持って生まれた人々の葛藤、そして、「母胎信仰」に対する信者たちの偏見や誤解を紹介している。

本稿で筆者は、「母胎信仰」の形成と拡散の背後にある韓国の社会的・教会的要因を明らかにしたい。方法論としては、先ず韓国の数種類の日刊新聞を通して「母胎信仰」の痕跡を探し、その特徴といつ頃から「母胎信仰」が形成され、信者たちの間で拡散されたのかを分析する。そして、新聞記事を基としてその時期の社会的背景を調べ、当時の教会で実施された牧会政策と女性たちの教会活動を探りつつ、「母胎信仰」の形成と拡散に影響を及ぼした社会的・教会的要因を考察して行きたい。

1 新聞記事を通して見られる「母胎信仰」

本研究のために、韓国の代表的な新聞である「朝鮮日報」、「東亜日報」、「京郷新聞」、「毎日経済」を選び、各新聞社が創立された1920年代から1990年代までに載った、「母胎」をキーワードとする全ての記事を検索し、その中で「母胎信仰」がどの

- 4 以前、筆者はシャーマニズムの「世襲巫」や「祈子信仰」、「伝統胎教」にその痕跡が見られることを考察した。金 潤貞「韓国の母胎信仰における現代宣教論的意義」、関西学院大学院神学研究科修士論文、2019. 3、金 潤貞「韓国の母胎信仰における民俗・文化的要素の考察」、関西学院大学神学研究会、2021. 3
- 5 ・ Lee Joo Ok 「청소년자녀와 부모의 갈등에 관한 질적연구」(青少年子女と父母の葛藤に関する質的研究)、延世大学大学院 (1993)
・ Sim Sang Mi 「한국의 기독교가정의 청소년자녀 종교교육에 관한 연구」(韓国の基督教家庭における青少年子女の宗教教育に関する研究)、梨花女子大学学校教育大学院 (1994)
・ O Sang Hwan 「카톨릭청소년들이 신앙생활에서 느끼는 갈등에 관한 연구」(カトリック青少年たちが信仰生活で感じる葛藤に関する研究)、カトリック大学院 (1998)
・ Jang Sang Gook 「청소년의 교회생활에 관한 방안연구」(青少年の教会生活に対する法案研究)、韓南大学大学院 (1998)

ように記されているかを調べた。

韓国語の「母胎」という言葉には「母親の胎」、「子宮」のような意味以外にも、「事物を生み出す基盤となるもの」、「事物の始まり」のような意味が含まれている。調査の結果、1928年から1950年代までの新聞記事に「母胎」という単語が16件見られたが、この時期に使われた「母胎」は、全て「事物の根元」という意味で使用されていた。1960年度に入ってから少々変化が起り、「母胎」と信仰が関連付けられた表現が見られるようになった。即ち、「母胎信仰」という単語は直接的に使われていないが、文脈の中で「母胎信仰」を示唆する表現が見られるようになる。1963年1月11日、「京郷新聞」1面には、次の記事が載っている。

Kim Yoon Geun 海兵少将は母胎からキリスト教の信仰に入り、溫柔と謙遜、信仰と希望の中で成長したため、彼には善と悪、そして、正義と私利私欲を区別できる能力があり、また、不義と必死で戦おうとする情熱、いわゆる召命感がある。

上記の Kim Yoon Geun 海兵少将は、当時政治的に影響力を及ぼした人物である。この記事では、彼の政治的な影響力と優れた人格について述べているが、そのような品性は胎内からの信仰に起因したとしている。つまり、彼は母胎から信仰を持っていたため、溫柔と謙遜、信仰と希望の中で成長出来たというのである。

1969年3月30日、「朝鮮日報」4面では、次のように書かれている。

フルート演奏者 KimSeongDo は、母胎の時からクリスチャンであるため、静かで、上品で、優しい青年である。…彼はバレーボール、スケートも名手である。

この記事も上記の記事のように、フルート演奏能力だけではなく、彼の良い品性を強調しているが、それも母胎からの信仰と繋げて考えている。上記の2件の記事では、「母胎信仰」に関する共通点が見える。信仰というのは、母胎から受け継がれるものであるという理解であり、更にこの人の才能や能力は母胎から受け継いだ信仰に起因するという考え方である。

1979年12月8日「東亜日報」5面では、非常に印象深い内容が載せられている。これは「80世界福音化大聖会」⁶の開催を目前において、その集会の大会長を担った Kim Chang Inn 牧師が「東亜日報」に連載した祈りの言葉である。

6 1980年8月12日-15日までソウルの汝矣島で開催された、五旬節教派主催の超教派連合世界リバイバル集会。国内外200万人以上の信者たちが参加した。

我々の祈りが叶えられ、この国のすべての土地に福音が伝えられる日、イエスの教えが韓国のあらゆるところに行き渡り、井戸端の女性たちや草取りをする農夫たちが、泉が湧き出るように賛美を口にし、各学校の教室では、誰から強要されるわけでもなく、聖書が最優先の必須科目として教えられ、すべての家で聖書が教えられ、この地に生まれる子どもは、母親の胎内から祈りと信仰の血筋で育ちつつ…

ここで最後の部分、「すべての家で聖書が教えられ、この地に生まれる子どもは、母親の胎内から祈りと信仰の血筋で育ちつつ…」に注目すると、Kim Chang Inn 牧師は民族の福音化のために、胎内の子どもたちまでも福音化されることを祈っている。母親と胎児が血筋を通して繋がっているように、胎児の信仰も母親の祈りと信仰によって育てられると語っている。ここにも「胎内からの信仰の伝授」という考えがよく表われている。

1981年5月22日「朝鮮日報」11面には、カトリック教会内の事柄として「母胎信仰」という言葉が初めて登場する。その後、1982年1月20日「朝鮮日報」9面には、次の記事が書かれている。

3年前、同僚選手からプレゼントをもらい、その後から動揺することなくテニスに集中することが出来た。非常に小さな十字架のネックレスだったが、大きな力となり、試合に負けた日も眠れないことがなくなった…その時、私はまだ信者でなかったが、多分母親が私を妊娠した時に洗礼を受けたから、私が「母胎信仰」の影響を受けたからである…

これは、1982年アジア大会の女子金メダリストであった申順浩の証である。彼女の話によると、普段は試合に負けると眠れなかったのに十字架のネックレスをもらって心の平安を得られたのは、「母胎信仰」の影響であると解釈している。自分を妊娠した時の母親の信仰的経験は、自分か自覚しなくても本人に影響を及ぼすものであると考えている。

次に1983年7月4日「京郷新聞」2面には、次のような記事が載っている。

「母胎信仰」として生まれ、成人後、聖職者になることを望んだ両親の意志に従って、「聖恩」という名前まで付けられた金將軍…引退後、早天5時に起きて家族たちと共に祈りをし、礼拝をする。

これは、1963 年国防部長官に任命され、当時の国家的危機の際に重要な役割を担った金聖恩の引退後の近況に関する記事である。記事によると、社会的に高い地位と影響力を発揮した彼は、信仰的にも優れている篤実なクリスチャンである。ここで、将来聖職者となることを望みつつ、信仰の名前まで授けた両親の信仰的熱情が印象的である。

次は、1985 年 4 月 16 日「京郷新聞」5 面に載った記事である。

女性教育家、書芸家でもあり、週に四日は主婦たちの講座を担う彼女は、「母胎クリスチャン」である。彼女は梨花女子大学を卒業し、梨花女子高校、培花女子高校の校長として、44 年間教育系に奉仕し、主婦クラブ連合会長、女性団体協議会会長を歴任し、多くの賞をもらった。

当時 71 才という年にもかかわらず、国政諮問委員として活躍した Lee Chul Kyong は、1914 年に生まれ、女子ミッションスクールを卒業し、母校や他学校の校長を長年歴任した女性教育家である。

その後、「母胎信仰」という語が載った記事は 1988 年に 1 件があり、1990 年以降はこの語が各新聞に登場する頻度が最も高くなる。1990 年の「朝鮮日報」に 2 件⁷、1992 年の「朝鮮日報」に 1 件、「毎日経済」に 1 件、「京郷新聞」に 4 件が、「東亜日報」に 1 件が載っている。

次の記事は、1992 年 10 月 31 日「京郷新聞」9 面に書かれた HanWan Sang 社会学教授の証である。

私は母胎でキリスト教信者になった。母親は私がお腹にいる 6 ヶ月目に大きな火傷を負った。その時に教会の伝道師が見舞いに来て伝えてくれた御言葉によって慰められることができたので、クリスチャンとなる決心をした。

その時、私は母胎で生き返り、母の乳と信仰の乳を同時に飲みながら育てられた。恵みによって、私はキリスト教信仰の乳を母胎から飲んだ。

1993 年第 18 代副総理と統一部長官、2001 年教育部長官を歴任した彼は、自分を妊娠した時の母親の信仰的な事件と「母胎信仰」を繋げて語っている。自分が胎内で母親の信仰の乳を飲みつつ、育てられるという彼の表現は印象的である。

その後、1993 年には「朝鮮日報」に 1 件、「東亜日報」に 2 件、「毎日経済」に 1

7 「母胎信仰」だったのに、後に信仰を捨てるカトリック信者は…」；1990 年 11 月 17 日「京郷新聞」27 面、1990 年 12 月 29 日「朝鮮日報」10 面、13 ページの注) 47 を参照。(Lee Seong Taek 牧師の証)

件、「京郷新聞」に6件である。1994年には「京郷新聞」に1件、1995年には「朝鮮日報」に1件、「東亜日報」に1件、「京郷新聞」に1件、1996年「京郷新聞」に1件、1997年1件、1999年1件の記事が見い出される。

次は、信仰と関係ない一般分野において「母胎信仰」の表現を使った記事である。

ある時代にアメリカのゴルフ界を席捲した父親の後を継ぐ息子たちが増えている。あまりに偉大な存在だった父親の後を追うために、その子どもたちが悩んでいるのも事実である。

まるで「母胎信仰」のように彼らは幼い頃から自然にゴルフに親しく…

(1992年5月28日「毎日経済」20面)

“ただ、興に乗るように演奏が出来るなら最高であろう！”

生まれながらに国楽を学んだ彼には、国楽が彼の人生そのものである…

父親は杖鼓、母親は小鼓を叩き…「母胎信仰」のような風物。

(1999年7月27日「京郷新聞」27面)

Sin Joon Hyon 氏の息子として、まるで「母胎信仰」のようにロックミュージックに接した Sin Dae Chul の話である…

(1997年3月6日「東亜日報」23面)

上記の3件は、父親と同じ専門を継ぐゴルファー、国楽叩楽器演奏者、ロックミュージシャンの紹介である。それぞれの記事を書いた記者が、クリスチャンかどうかは確認できないが、親から子どもへの信仰の伝授を意味する「母胎信仰」の考え方と用語が、教会と関係ない一般的文脈の中でも使われるようになった現象は意味深い。

以上のように1960年代から1990年代までの新聞記事を分析すると、「母胎信仰」は、人としての社会的承認と高い教育水準や卓越した才能、母親の影響力、女性の社会進出などと結びつけて書かれているという特徴が見られる。

1950年代まで信仰とは関係なく使われた「母胎」という言葉が、1960年代に入ってから「母胎での信仰者」という信仰的文脈の中で使用され始めた。その際、「母胎信仰」という用語は直接的に使われてはいないが、「胎内からのクリスチャン」という考え方は明確に存在した。1970年代の新聞記事にもこの考え方は続いて表れている。「胎内からの信仰者」という考えが「母胎信仰」と名付けられ、新聞上に初めて登場したのは1981年である。1980年代の新聞記事には、「母胎信仰」と「胎内からの信仰者」という考えが同時に使われている。1990年代以降から「母胎信仰」はよ

り頻繁に使われているが、ここで興味深いのは宗教とは関係がない一般記事にも、「母胎信仰」の概念が比喩的に使われている事実である。これらの記事のほとんどが、子どもによって「母胎信仰」が語られているのは、先述のように「母胎信仰」が信仰を受け継いだ人物の自意識を表現する言葉であるからである。

従って、「母胎信仰」は 1960-1990 年代の間にキリスト教信者たちの間で形成され、拡散し、韓国社会で一般的に通用される大衆的用語となったと考える。

2 「母胎信仰」の形成と拡散における社会的要因

1 章では新聞記事の分析を通して「母胎信仰」の形成・拡散時期と、「母胎信仰」の特徴を調べた。それぞれの記事に見られる「母胎信仰」の特徴は、当時の社会的状況がある程度反映していると推測される。この章では、1960-1990 年代の韓国の社会的特徴を調べ、「母胎信仰」に見られる特徴と比較しつつ、「母胎信仰」における社会的要因を探っていききたい。

2.1 「新家族主義」の出現と「教育的母性」

韓国では 1962 年から政府の主導下で経済開発 5 ヶ年計画による急速な「産業化」が始まった。この時期に「産業化」がもたらした特徴的な現象は、「都市化」と首都圏への人口移動である。つまり、農村に居住する多くの人々が就学、就職などを契機に都市が持つ経済的・教育的・文化的条件に惹かれ、大挙して都市に移り住んだのである。そのような都市への人口集中現象は、親子関係中心の 3 世代の直系家族から夫婦関係中心の核家族化という現象をもたらした⁸。

しかし、「核家族」の始発点をもっと綿密に分析すると、朝鮮戦争と分断による人口移動が激しかった 1950 年代から始まったと考える⁹。韓国社会において 1950 年代という時期は、日本の植民地からの解放以後、国家を建立する余裕もない中で、3 年にわたる朝鮮戦争が起き、政治的・社会的・経済的・思想的に前例のない極度の疲弊と混乱が続いた期間である。戦争と分断は、大多数の韓国人たちが故郷を離れて他の地域に移動する切っ掛けとなった。信仰の自由を求めて北から南の方に逃げ出した多くのキリスト教信者たち、戦争によって夫を失った女性や孤児など、大勢の人々は自分の故郷から離れ、避難地に留まるか、仕事を探して都市に移住した。さらに、植民地からの解放後、日本や満洲から帰還した人々や農地改革過程で没落した大部分の小

8 鄭花玉「統計で見る大韓民国の女性の生き方 (1)」、『統計』、2006 年 7 月号、43 頁を参照。

9 1950 年代には「核家族」が都市では 81.9%、農村では 69.4% に至った。Hong Seok Ryoul 「종결되지 못한 분단과 전쟁 그리고 난민의 삶」(終結されてない分断と戦争、そして難民の暮らし)、『한국현대 생활문화사 1950 년대』(韓国現代生活文化史 1950 年代)、Chang Bi、2016、22 頁を参照。

農民たちも都市に集まったのである¹⁰。

儒教的伝統家族主義社会では、家族内の倫理と結束力が地域社会へと繋がり、公共倫理を形成していった。しかし、戦後に職業を探して故郷を離れ、都市に移住した大勢の人々はそのような相互関係性を失い、都市という競争社会で生き残るために自分の核家族のみを中心として強く団結し、「新家族主義」を形成した¹¹。「新家族主義」は、既存の家父長制家族の近代的変形として説明できるが、つまり、夫婦中心の核家族理念が直系家族原理と結合した、この時期を代表する重要な家族イデオロギーと言えよう¹²。

この「新家族主義」現象は、女性の役割にも大いなる変化をもたらし、教育的母性像を定着させた。この時期の大部分の母親たちは家族を支えることを最大の任務として考え、育児と教育に没入した。戦後に社会全体が絶対的貧困層に転落した悲惨な状況の中でも、子どもの教育に全力を注いだ人々の情熱は注目に値する¹³。1950年代末の韓国はまだ戦争の爪痕が深く、世界の中で最貧国の一つであったが、既にその時期に初等学校の就学率は、ほぼ100%に達していたのである¹⁴。その教育熱は産業化と共に進んだが、都市への移動によって直系家族から離れ、新しい競争的環境に置かれるようになった大多数の人々は、子どもの教育を通して家庭の地位向上を求め、益々高い教育への意欲を見せた¹⁵。小学校から大学に至るまで、名門学校に入学するために各種の塾が盛んになったが、母親がその役割の全てを担当したのである¹⁶。

以上のように、1960-1990年代の社会的特徴は「新家族主義」の出現として要約される。戦争や産業化がもたらした急激な核家族化の過程で生じた「新家族主義」では、家庭の成功の手段として子どもの教育が強調され、母親たちには「教育的母性」という新しい役割が与えられた。子どもの教育に関する全てを担うようになった母親たちは、家庭内で多大な教育的影響力を発揮し、高い地位を持つようになったのである。

2.2 「母胎信仰」の形成と拡散における社会的要因

それでは「母胎信仰」は「新家族主義」とどのような関連があるのか。ここで、「母胎信仰」の特徴と「新家族主義」の特徴を比べつつ、考えたい。1章の新聞記事

10 産業化以前にも都市の人口比率は1949年17.2%、1955年24.5%、1960年代28%に増加していた。Lee Ha Na「전쟁미망인 그리고 자유부인」(戦争未亡人、そして、自由婦人)、『한국현대생활문화사 1950년대』(韓国現代生活文化史1950年代)、Chang Bi、2016、67-68頁を参照。

11 Hong Seok Ryoul、前掲書、22頁を参照。

12 Lee Jae Kyong『가족의 이름으로』(家族の名前によって)、もう一つの文化、2003、127頁を参照。

13 Hong Seok Ryoul、前掲書、23頁を参照。

14 平田由紀江・小島優生『韓国家族』、亜紀書房、2014、255頁を参照。

15 Hong Seok Ryoul、前掲書、23頁を参照。

16 Lee Ha Na、前掲書、69頁を参照。

から見られる「母胎信仰」の特徴を詳しく説明すると次のようである。

一つ目は、「母胎信仰」に対する社会の肯定的評価である。当時の韓国社会でクリスチャンであることは非常に肯定的イメージを持っており、さらに「母胎信仰」であることは最高の評価を受けたようである。各記事に出て来る人々は政治、経済、社会、教育、宗教、芸術、芸能において非常に高い地位にいるが、さらに彼らが「母胎信仰」であることは人格の保証のような信頼感を与えるのである。

二つ目は、「母胎信仰」と高い教育水準や卓越した才能との関連付けである。新聞記事に出て来る人々は政治家、教育家、社会学者、社長、牧師、長官、将軍、教授、芸術家、芸能人、スポーツ選手など、社会的に注目されている著名人である。有能な人々の中でクリスチャン、特に、「母胎信仰」が多いこと、そして、その優秀な能力が母胎から受け継いだ信仰から起因したと語る人々の考えは特徴的である。

三つ目は、「母胎信仰」における母親の影響力である。各新聞記事に出て来る人々の中には、自分を妊娠した時の母親の信仰と現在の自分の信仰を結びつけ、考える傾向が見える。彼らは、父親の信仰や自分の信仰ではなく、自分が母胎にいる時に母親が体験した信仰の事柄や母親の信仰状態を語っている。新聞記事の中には自分の信仰的経験によって子どもに宗教的な名前を名付け、聖職者の道を望んでいる母親の姿も見られる。

四つ目は、高い教育を受け、社会発展に寄与する女性の影響力である。人数は少ないが、1章に出て来る「母胎信仰」の中には社会的に高い地位を持ち、大きな影響力を与える女性何人かいる。彼女たちは国会議員や長官、教育家、芸能人、スポーツ選手として、男性と同等に社会と国家発展に貢献している。

上記のように「母胎信仰」に見られる特徴は、前述した「新家族主義」の重要な特徴、つまり、高い教育熱、母親たちの影響力、女性たちの社会進出と教育水準向上などと一致する。従って、「母胎信仰」は、「教育的母性」を強調する「新家族主義」の影響を受けつつ、形成・拡散されたと言えよう。

3 「母胎信仰」の形成と拡散における教会的要因

2章では「母胎信仰」の形成と拡散において、「教育的母性」という「新家族主義」イデオロギーが社会的要因として大きく作用したことを探った。しかし、「教育的母性」という社会的要因だけで、「母胎信仰」が多くの信者たちの間で形成、拡散されたとは考えにくい。「母胎信仰」は社会の中で形成されたのではなく、教会の中で形成し、韓国のキリスト教信者の自己意識として拡散していったからである。逆に言うならば、教会的要因も母胎信仰を形成した独立した要因ではなく、社会的要因とも密

接な関係を持つものである。

この時期は韓国キリスト教の量的リバイバルの全盛期であり、女性たちの積極的な献身によって教会の成長・発展ができたと言っても過言ではない。ここで予測可能なのは、社会的要因と女性たちの教会活動との相互関連性である。それ故、「母胎信仰」の形成と拡散は、当時の女性たちが抱えていた社会的課題と彼女たちの教会での活動との関連性の中で考える必要がある。本章では、1960-1990年代の間に実施された教会の牧会政策やそれによる女性たちの教会活動を中心として調べつつ、「母胎信仰」の形成と拡散を探りたい。

3.1 社会と女性

女性たちの積極的な教会活動について論じる前に、なぜ当時の女性たちが教会に惹かれ、教会に依存するようになったのか、その社会的背景を知る必要がある。

まず、朝鮮戦争と産業化社会への急激な移行が生み出した深刻な社会的病弊が挙げられる。戦後も韓国人たちは長期間に亘り、「災難症候群 (disaster syndrome)」と呼ばれる症状を見せるようになった。その時、教会は多くの人々に慰めと希望のメッセージを伝えつつ、戦争による死から生き残った人々はまた襲って来るかもしれない災難から自分たちを守るために、キリスト教信仰に頼るようになったのである¹⁷。また、農業社会から産業社会への急激な転換には各種の副次的な現象も付いてきた。各自異なる文化的背景を有する人々の打算的な人間関係によって構成されている「都市化」から派生した不安と絶望、孤独、疎外感、アイデンティティーの混乱などは、キリスト教に頼る重要な心理的要因として作用した¹⁸。

次に挙げられるのは、核家族化と女性たちの社会進出のような社会変化にもかかわらず、家族や社会全般には家父長的思考が遍在したことである。朝鮮戦争と産業化は女性の社会進出の扉を開け、多くの女性勤労者たちを創出した。さらに、マスコミや女性雑誌では有能で現代的な女性像を理想化する風潮が蔓延し、社会進出を漠然と憧れる女性たちが増えた。しかし、劣悪な勤労環境、女性自身の保守的価値観による就職に対する罪意識、完璧な主婦と「教育的母性」を強調する家父長的社会の要求など、社会での現実的な就職を阻む要因によって、経済的理由がなければ大体の女性たちは専業主婦の道を選択した¹⁹。時間的に余裕があり、保守的な思考を持っていた多

17 戦後の教会は慰めのメッセージを伝えるために審判と正義の神より、善なる愛の神をより強調した。純福音教会がその代表的教会である。

18 韓国基督教歴史学会編『韓国キリスト教の歴史 第三卷～解放(1945)から20世紀まで～』Seoul、韓国基督教歴史研究所、2009。

韓国キリスト教歴史学会編・常石希望訳「翻訳 1960-1990年代韓国キリスト教の成長と発展—その現象と要因—」、『愛知大学国際問題研究所紀要』、愛知大学国際問題研究所、2011、154頁を参照。

19 非熟練職などに勤めている女性の場合、家事を疎かにすることについて罪悪感を感じ、経済的な余

くの女性たちにとって、教会は社会的参与と自我実現が出来る安全で魅力的な場所として感じられたのだろう。

最後に、クリスチャンたちが社会に与えた影響力が挙げられる。新聞記事の中でも見られるように、当時の母親たちはクリスチャンについて教育的で肯定的なイメージを持っていた。その理由は、韓国キリスト教の宣教初期、一世代女性信者たちが教会を通して経験した教育と社会的参与の機会、そして信仰の自由を求めて韓国の北から南の方に逃げて来た多くのクリスチャンたちの影響力にある。女性たちは「ハングル教育」²⁰と「사경회 (サキョンフエ)」²¹を通して文盲から脱皮し、宣教師たちが設立したキリスト教女子学校の教育を通して、社会の各所で男性と対等に大いなる貢献をした²²。1章で紹介した1914年生 Lee Chul Kyong がその一つの実例である。彼女は、当時のミッションスクール、梨花女子大学に入り、キリスト教教育を受けて一生を通して女性たちの教育に献身した典型的な「母胎信仰」である。

また「母胎信仰」を持つ人々の中には、信仰の自由を求めて北から降りて来た人たちが多く含まれている²³。1950年朝鮮戦争の前後には多くのクリスチャンたちが、信仰の自由を求めて韓国の北から南の方に逃げて来た。それらの人々の中にはアメリカ留学出身のエリートやキリスト教の教育を受けた知識層の人物、牧師、クリスチャンたちが多く、彼らは、徹底的な反共意識を持ち、当時の政治・経済・社会の全般において、主導権を發揮した。

上記のように、戦争と急激な産業化による心理的傷痕、核家族化と女性の社会進出のような社会変化、依然として社会の隅々に残っていた家父長制の抑圧、クリスチャンたちの社会的影響力などの状況は、当時の女性たちが教会に惹かれ、積極的に協力する原因となった。また、それらの要因は2.1で述べた「新家族主義」出現の背後としても考えられる。それ故、韓国キリスト教の成長と発展は、当時の社会的状況、特

ㄱ 裕さえあれば、いつでもやめて家庭に戻りたいという保守的な就業観を持っている。本村 汎・金 恩美「韓国における『既婚女性の家庭役割規範』および『家庭主義』に対する既婚男女の態度－主婦の家庭外就労の阻害要因の発見に向けて－」、『大阪市立大学生生活科学部紀要 第38巻』、1990、405頁を参照。

20 宣教と共に行われたハングル教育は、学習が禁止された女性の文盲解消に大きな貢献をした。

21 1898年平壤で最初に女性のみの聖書研究会を開いた。

22 Rhie Deok Joo「자유와 해방, 그리고 실천－조기 한국 기독교 여성사 이해 (1887-1920)」(自由と解放、そして実践－韓国初期キリスト教女性史理解)、『한국교회와 여성』(韓国教会と女性)、韓国教会探究センタ Ivp、2013、93頁を参照。

23 ・私は「母胎信仰」である…共産党のせいで、南の方に逃げて南の「영락교회」(ヨンラク教会)を通う間、朝鮮戦争が起きた。戦後、基督教教文社を設立し…ソウルの近くでも「HanNa Won」という養老園を始め…平壤北出身イエス長老教統合側会長、基督教教文社代表、基督公報社社長 Han Yeong Je 長老の証。1992年9月26日「京郷新聞」

・“李牧師の故郷は北の平壤から50km離れた平南大東郡大東面。彼が牧師になったのは両親がクリスチャンであったので、「母胎信仰」でもあるが…牧会者になるために神学校に入ったが、朝鮮戦争がおき、南の方に避難して牧会をした…” Lee Seong Taek 牧師の紹介。1990年12月29日「朝鮮日報」

に「新家族主義」と密接に関連していると言えよう。

3.2 教会と女性

ここでは当時の教会の牧会方針や女性たちの教会活動について調べたい。1960年代から1990年代に及ぶ期間は、韓国プロテスタントキリスト教が異例の量的成長を遂げた時期である。多くの教会は、社会に対する関心より教会の量的成長を目標とする牧会神学を優先し、「教会成長論」²⁴や「教役理論」²⁵を導入した。

大型教会は、1960年代から徹夜祈禱会を始めとする様々な形態の祈禱会を開催し、また、平信徒を対象とした聖書の勉強や弟子訓練プログラムなどを開始するなど、多様なプログラムを開発した。目標は、区域と属会の組織を強化し、全教会員を教会内の各種の宣教会や活動組織に動員することであった。これらのプログラムは、教会員たちにアイデンティティと所属感を持たせることとなり、伝道に対する使命感を植え付け、その動機付けを誘発し、教会に活力を吹き込んだ²⁶。このような牧会方針の下で、女性たちには多種多様な教育の機会と様々な教会活動においてリーダーとして働けるチャンスが与えられたのである。

この時期、教会に対する女性たちの献身と寄与は次の四つに要約できる。

一つ目、教会に対する女性たちの積極的従順と熱情、そして、聖書や教理に関する保守的思考は、教会の復興に大きな役割を果たした。女性信者たちは教会の働きについて肯定的で無条件的な従順さを示した。キリスト教の教理や聖書についても、絶対的で保守的な福音主義の信念を固守した。このような女性信徒たちの受容的な態度は共同体全般に活気を吹き込み、教会のリバイバルの原動力となったのである。

二つ目、女性たちは各種集会や献金、伝道運動において積極的に協力し、教会の量的成長に貢献した。この時期の韓国教会は「各種集会」、「献金」、「伝道活動」、を最大限に活性化したが、背後に女性たちの積極的な協力があつた。例えば、午前・午後・夕方に分けて行われる日曜礼拝や早天祈禱会、水曜礼拝、金曜礼拝、区域礼拝など、それぞれの定期的・非定期的集会において、参加者の大多数は女性であった。また、十一献金、月定献金、建築献金など、各種献金プログラムにおいても、女性信者たちの献身的な対処によって、教会の財政と運営が維持できた。

24 1960年にフラワー神学校のマックギャブランが基礎を据え、ワグナーがそれを発展させた理論。平信徒を訓練して、彼らを教会成長のために動員し、教会以外のバラ・チャーチ機関と連携することを提示する。韓国基督教歴史学会編・常石希望訳、前掲書、161頁を参照。

25 教会成長論と共に量的成長を求めたシューラーの理論。彼は教会が成長するためには、経済力のある教会、すなわち大きくて捜しやすい教会、駐車するのが便利な教会、また良いプログラムがある教会、平信徒が熱心に参加し、自らをよく宣伝する教会を作らなければならないと主張した。ロバート・シューラー著・佐藤陽二訳『あなたの教会は必ず成長する』、聖文舎、1977、46-64頁を参照。

26 韓国基督教歴史学会編・常石希望訳、前掲書、163頁を参照。

三つ目、教会内の多様な奉仕と活動を女性たちが積極的に担うことによって教会発展に貢献した。前述したように「教会成長論」の導入によって、教会内には色々な役割が必要となった。そこで、女性たちは、女性会、セルグループなど共同体の一員、もしくは、リーダーとして働いた。また、彼女らの日曜学校や聖歌隊など特定部署での奉仕活動は教会の内的発展に貢献した²⁷。

四つ目は、教会や牧会者の方針に女性たちが絶対的に協力することによって、牧会者を精神的に支え、牧会を成功させる重要な役割をして来た。韓国社会で女性たちに要求されてきた「従順」という儒教的徳目は、教会で肯定的に作用した。女性たちは教会の運営方針や政策について従順的な態度を取り、牧会者の協力者としての役割を果たした²⁸。

このような教会活動における奉仕と苦労は、牧会者に認められることを通して女性たちに達成感と心理的補償を与えた。さらに、女性会の会長、聖歌隊の管理者、区域長、役員などの職位に任命されることによって、教会内での自分の地位が上がるという精神的満足を感じることが出来た。教会を通して得られる社会的承認は、家庭の主婦以外には社会的地位を得る機会がなかった女性たちにとって心理的報奨感を与えた。それは一方でまた自分の家庭に最善を尽くす原動力ともなり、更に教会活動に献身できるモチベーションを与えた²⁹。

ここで「母胎信仰」の拡散と関連して注目したいのは、「伝道活動」である。上述のように当時の韓国教会は、教会の量的成長を最大の目標として、信者たちの伝道活動を強調した。各教会では様々な名称で年に数回の伝道大会が行われ、その目標はもちろん未信者たちへの伝道であったが、更に重要なのは家族伝道であり、教会の役員であるほど、家族伝道へのミッションは強調された。このような伝道活動において、女性たちは積極的に参加し、韓国教会の量的成長に多大な貢献をした³⁰。

また、この時期には教団の次元を超えて超教派連合大型集会在頻繁に開かれたが、その際、民族福音化運動の一つとして家族伝道も強調された³¹。1979年12月8日「東亜日報」5面に載せられた「80世界福音化大聖会」の祈りがその例の一つである。

27 Song Inn Kyu 「교회에는 왜 여성들이 더 많을까」(教会にはなぜ女性たちがもっと多いのか-女性、男性、宗教性-)、『한국교회와 여성』(韓国教会と女性)、韓国教会探究センタ Ivp、2013、248頁を参照。

28 同書、246-250頁を参照。

29 Lee Jeong Sook 「우리의 딸들이 즐겁게 예배하기 위해」(我々の娘たちが楽しく礼拝するために)、『한국교회와 여성』(韓国教会と女性)、韓国教会探究センタ Ivp、2013、132-133頁を参照。

30 Song Inn Kyu、前掲書、248頁を参照。

31 1965年「韓国プロテスタント宣教80周年記念超教派伝道リバイバル集会」、1973年「Billy Graham 伝道大会」、1974年「Explore 74」、1977年「77民族福音化聖会」、1980年「80世界福音化大会」、1984年「韓国プロテスタントキリスト教100周年宣教大会」、「1988年世界福音化大聖会」、「オリンピック伝道協議会」など。

その集会の大会長 Kim Chang Inn 牧師が書いた祈りは、全民族の福音化を願っている「民族の福音化」シリーズの一つである³²。この祈りに見られるように、胎児の福音化は母親の祈りと信仰によってなされると考えられていた。実際に「80世界福音化大聖会」の最後の日は、国内外の宣教活動に物心両面に協力することを勧め、誓約する特別プログラムがあったが、その一つが自分の子どもに代わって代理献身する誓約であった³³。その際に大勢の人が誓約をし、その事柄を通して現在牧会者になったことを回顧する証も見られる。

「母胎信仰」は、教会の量的成長が最大の目標であった1960-1990年代の間、民族福音化の熱望と女性たちの献身的な伝道活動の過程で拡散された。常に教会の協力者であり、教会に積極的従順をした女性たちは、「母胎信仰」を通して「家族伝道」というミッションを忠実に遂行したのだろう。

3.3 女性たちの戦略

3.2では、女性たちの積極的な教会活動による「母胎信仰」の拡散を探った。ここで、一つの疑問が起きる。家族伝道という教会の牧会政策と教会への協力という女性たちの受動的な行動だけで、「母胎信仰」が拡散できたのか。果たして女性たちは教会活動に対して、単に受け身的な立場だけを取ったのか。教会活動において女性からの自発的で能動的なメカニズムは一切なかったのだろうか。

3.2で教会を通して得られる心理的報奨感、また女性たちが自分の家庭に最善を尽くすことの出来る原動力となり、教会活動に献身できるモチベーションを与えたことが分かった。Kelly Chong³⁴は「ジェンダー妥協」という概念を使って、このような韓国教会での女性たちの活動を「戦略的従順」として解釈する。即ち、保守的傾向が強い韓国教会で、常に女性たちは教会の秩序と権威に厳格に従属して来た。しかし、その女性たちの従順は、教会に対する単純な降伏を意味するのではなく、家庭の安定性を上げるために使う女性たちの一つの戦略である。教会の運営や行政的決定に関与できる程の重要な役割ではなく、ヘルパーや奉仕者として働いたのにもかかわらず、多くの女性たちにとって教会活動は、自分の自律的領域と才能を活用できる機会を与えた。例えば、教会活動のため、家から離れて頻繁に集まることによって自分たちだけの空間を作ることができ、その空間で女性たちは一時的ではあるが自由と安心感を体験した。このような教会の集まりは、家族に認められる社会的参加の安全な場

32 “この地に生まれる子どもごとに、母親の胎内から祈りと信仰の血管で育ちつつ…”

33 80世界福音化大聖会(1980. 8. 12-15)の最後の日、Kim Joon Kon 講師牧師は、①海外宣教のために祈ること②宣教の財政支援に参加すること③子どもを神に献身させる代理献身④本人が長・短期に献身することを提示した。

34 在米社会学者。韓国教会における女性たちの教会活動を研究した。

所となると同時に、女性たちの生活の求心点となった。

特に、教会内のリーダーに任命されることによって、教会で献身と貢献ができ、その結果として牧師から認められることは、女性たちの達成感や満足感、自尊心を高めた。このような女性たちの教会参与は、家父長的抑圧からくるストレスから彼女たちを解放させ、家庭内の葛藤と苦痛を耐える内的資源を提供し、家庭生活を維持させる重要な役割をする。それ故、女性たちは社会的に合法的な手段として、教会を積極的に活用するのである³⁵。

ここで興味深いのは、教会活動における女性たちの「戦略的従順」が、既に韓国の伝統家父長制家族内で行われて来たことである。即ち、韓国の伝統家父長制家族は家族関係を中心として二重的構造を成しており、この二つは明らかに分離していながらも常に共存して来た。つまり、家父長を中心として外形的に形成された権力構造である「父子関係」と、母を中心として内面的に形成された愛情構造である「母子関係」である³⁶。「母子関係」は、家父長的「父子関係」が強く表面化されるほど、より厚い愛情関係を形成しつつ内面化され、家父長制家族の内側で心理的・情緒的に「母権家族」を形成した。「母子関係」を基盤とするこの「母権家族」は、父系中心家族制度の中で常に劣勢であった女性が、こどもの出産を通して自分の領域を新しく構築していく一種の「戦略」として解釈される³⁷。このような愛情的忠誠関係である「母権家族」を、M. Wolf³⁸は「子宮家族」(uterine family)と呼んだ³⁹。

Cho Hea Jeong⁴⁰は「子宮家族」を次のように解釈する。即ち、夫の家に編入され、一番低い地位にいた嫁は、自身が産んだ子女を中心として段々と自分の勢力を構築していくのである。韓国の場合、「孝」の倫理まで加算され、愛情と忠誠心に基づいた「子宮家族」の紐帯感と威力は、公式的な父系家族以上以上の強力な拘束性を持っていた。儒教的家父長制度が女性を徹底的に排除しながらも、成功的に女性を吸収できた理由も、女性にとって自分が一生構築した「子宮家族」による報いへの可能性が老後にあったからだと述べる⁴¹。

女性たちが献身的な教会活動を通して社会的承認と達成感を感じられたのは、直系家族の崩壊以後にも家庭と社会の隅々に残っている家父長的抑圧と差別にその原因を探せる。Kelly Chong が語る、教会を積極的に活用する女性たちの「戦略的従順」

35 Kelly Chong, "Negotiating Patriarchy: South Korean Evangelical Woman and Politics of Gender," *Gender and Society*, 20, no.6, Dec. (2006), pp.712-719

36 Lee Kwang Kyu 『한국가족의구조분석』(韓国家族の構造分析)、一志社、1975、166頁を参照。

37 同書、169-172頁を参照。

38 アメリカの人類学者

39 Wolf, M., *Woman and family in rural Taiwan*, Stanford University Press Stanford California, 1972, pp 32-41. 彼女は東アジア、特に中国や韓国の家父長制家族で「子宮家族」が顕著に見られると語る。

40 韓国の人類学者、女性学者

41 Cho Hea Jeong 『한국의 여성과 남성』(韓国の女性と男性)、文学と知性社、1988、87-88頁を参照。

は、元々韓国の伝統家父長制家族で「子宮家族」を形成し、生きて来た女性たちの戦略と同じ文脈であると考える。1960-1990年代の間、女性たちの教会活動が積極的に展開され、「母胎信仰」が信者たちの間で拡散し、定着できた基底には、強い「母子関係」に基づいた「子宮家族」を通して家庭内での自身たちの勢力を広めつつ、同時に父系家族を支えて来た韓国女性たちの戦略的な生き方が、教会活動の中でも適用されたからであると考える。

量的成長を目指して各教会が各種の伝道活動、特に家族伝道を強調する際、常に教会の力強い助力者であった母親たちは、愛情的忠誠関係である「子宮家族」を通して家族伝道を忠実に遂行し、教会から社会的承認と達成感を得られたと同時に、家庭では「子宮家族」を通して信仰的、教育的影響力を発揮しつつ、自分の領域を広めたいだろう。このような「戦略的従順」を通して表れた母親たちの信仰的影響力と熱情は、「母胎信仰」に強く反映され、「母胎からの信仰の伝授」という思考を形成しつつ、信者たちの間で拡散されたと考える。

結 論

本稿では、「母胎信仰」の形成と拡散の背後にある韓国の社会的・教會的要因を考察した。そのために先ず、新聞記事を分析して「母胎信仰」の形成、その拡散時期と「母胎信仰」の特徴を調べた。その結果、1960-1990年の間に形成、拡散した「母胎信仰」は、社会的承認と高い社会的地位や教育水準、母親の大きな影響力、女性の社会的参与などと関連づけて理解されたという特徴がある。

次に、この時期の社会的背景を調べた結果、この時期は「新家族主義」の出現により「教育的母性」が要求された時期であり、子どもの教育に対する母親たちの影響力と家庭内での地位が高くなったという社会的特徴を見せている。このような特徴は、新聞記事の分析を通して見られる「母胎信仰」の特徴とも一致し、「母胎信仰」が社会的影響を受けて形成、拡散したことを表す。

また、この時期の教会の状況を調べると、1960-1990年の間は韓国教会の最大成長・発展期であり、特に、民族の福音化と教会の量的成長を目標とする牧会政策が実施され、教会の内外で各種の伝道活動が活発に展開された。その裏には、女性信者たちの積極的で献身的な従順があり、それによって教会活動が力強く支えられた。

彼女たちのこのような従順さは、単に教会に対する受動的意味の奉仕を意味したのではなく、本来、韓国の家父長制家族の裏に存在し、家族を維持・発展させてきた女性たちの「戦略的従順」と同じ原理に起因する。常に教会の情熱的助力者であった女性たちは、「母胎信仰」を通して家族伝道のミッションを忠実に遂行し、教会で社会

的承認と達成感を得ると同時に、家庭では信仰的、教育的影響力を発揮した。そうして同時に家庭と教会を支えて来たのである。「家族信仰」と同じ意味を持ちながらも、「母胎信仰」と呼ばれつつ、「母胎からの信仰の伝授」という独特な考え方を含んでいるのは、このような母親たちの信仰的、教育的影響力が反映された結果であろう。

以上を要約すると、「母胎信仰」は 1960-1990 年代の間に「教育的母性」という社会的影響を受け、また、「家族伝道」という女性たちの積極的教会活動の過程で形成され、拡散したと言える。

この研究においては新聞記事を対象として分析したが、そのことはこの研究の方法論であると同時に限界でもある。また、今後の「母胎信仰」の研究において、これから考えるべき課題も残っている。母親の信仰的・教育的影響力が重視されている「母胎信仰」において、「神の恵み」はどのような位置を占めているのか。「母胎信仰」の受け手である子どもたちの自由意志と回心、そして、救いへの確信などの悩みに対してはどのような対応ができるのか。韓国キリスト教の宣教初期に行われた女性宣教が多く女性たちに霊的解放と自由を与えたように、「母胎信仰」は果して女性たちに霊的解放と自由を与えているのか。

今日の「母胎信仰」が、朝鮮戦争と「産業化」以後の急激な社会的変動の中で登場した「新家族主義」の影響を受けて拡散されたように、今後の社会的変化によって「母胎信仰」はまた違う形に変わる可能性もある。即ち、高度な科学技術の発達、宗教的影響力の弱体化、女性たちの地位上昇、高級専門職に就く女性人口の増加とその結果として女性たちの教会活動の減少、出産率の低下、家父長的価値観や「孝」思想の弱体化などの社会的変化は、「母胎信仰」を弱体化させるか、また新しい形態のキリスト教文化を創出させるかもしれない。

福音と文化の出会いの際には、その地の文化だけではなく社会・教育・心理・経済・政治などの多様な要因が影響を与える。本稿ではその中で「母胎信仰」の形成や拡散における社会的・教会的要因を考察したが、今後は女性神学的観点から、最終的には、「母胎信仰」の持つ宣教学的意義を熟考したい。

【ABSTRACT】

Social and Ecclesial Factors of the Formation and Spread of
‘Botai-Shinko (Worship of Womb)’ in Korea

KIM Yoon Jung

In this thesis, I examined social and Christian factors in Korea which exist behind the formation and the propagation of “Botai-Shinko”.

First, by analyzing newspaper articles, I investigated when and how “Botai-Shinko” was formed and spread, and I also attempted to find out what characteristics “Botai-Shinko” has. The research indicates that “Botai-Shinko” was shaped and popularized between 1960 and 1990, and that the general acceptance of “Botai-Shinko” was actualized by being related to high social status, high educational level, and mothers’ great influence of Christians who hold it, and also Christian women’s active participation in society.

Next, by looking into Korean social background of that period, I found that so-called “New Family Policy” appeared in Korean society and that in consequence, people required “Educational Motherhood”. It is recognized generally that in Korean society of that time, mothers had great influence on education of their children, and that as a result, their status at home rose remarkably. These features correspond with those of Christians and Christian homes with “Botai-Shinko” which were indicated by the analysis of newspaper articles. Accordingly, we could argue that “Botai-Shinko” was formed and propagated under the social influence stated above.

Korean Christian Church grew and developed at its greatest level in the same period of 1960-1990. The Church carried out a social policy of the evangelization of Korean people, and it particularly aimed for its quantitative growth. Consequently, missionary activities were deployed actively inside and outside of the Church. It should be mentioned that women Christians supported powerfully Church activities, behind the scenes, by acting dedicatedly and obediently to the policy.

Their dedication and obedience did not simply mean their submissive and passive attitude of service to the Church, but also resulted from the principle of “Women’s Strategic Obedience” which existed in the Korean patriarchal family, maintaining and developing their own family. Being always passionate supporters of the Church, those women executed sincerely the mission of evangelizing their family by practicing “Botai-Shinko”. They acquired social approval and the feeling of achievement in the Church, and on the other hand,

they exhibited their religious and educational influence in their own family. Although having a similar meaning to “Family Faith”, “Botai-Shinko” includes an original way of thinking, which is, “Instruction of Faith from the Mother’s Womb”. This original meaning in “Botai-Shinko” could be caused through Korean mothers’ religious and educational influence.

In summary, “Botai-Shinko” was formed and propagated between 1960 and 1990, under the social influence of “Educational Motherhood”, and in the process of women’s passionate church activities known as “Family Evangelization”.